

客観とオブジェクトウム

——相手と空間への二つの係わり方——

實川 幹朗

「客観」という言葉と *objectum*

欧州語の「客観」にあたる言葉であるドイツ語の *Objekt*、英語の *object* などは、ラテン語のオブジェクトウム *objectum* を語源とし、スコラ哲学以来の伝統を引き継ぐ。そして「客観」なる言葉は、少なくとも今日の用法としてはこれら欧州語の訳として用いられ、西洋哲学から翻訳された概念を現わすと考えられているであろう。この訳を始めたのは西周と言われるが、オブジェクトウムは哲学的文脈ではもちろん、および日常の用法においても今日では「客観」の訳が最も親しまれているにちがいない。

ところが、改めて振り返ってみると、オブジェクトウムという言葉の中には「客観」の「観」にあたる意味は全く含まれていない。 *objectum* は、「前に」とか「向かって」の意味の前置詞 *ob*

と、「投げる」意味の動詞 *icere* の複合からなる動詞 *obicere* からの派生語である。直訳すれば「前投」「対投」か「面当」くらいになりそうなものだが、なぜか「客観」と訳され、しかも定着した。もっとも、これだけではこの言葉の意味が汲み尽くせないために、「対象」をはじめ「客体」「事物」「目標」、果ては「目的語」に至るまで様々な訳語が場合にに応じて使い分けられる。しかもこれは歴史の中でオブジェクトウム由来の言葉に様ざまな意味が与えられた結果ではなく、欧州語ではほぼ同一に理解されるものが、日本語になると同じ言葉では文脈に合わなくなってしまうという事情による。オブジェクトウムの対語スブジェクトウム *subiectum* が「家来」になったり「主体」になったりする場合はわけが違うのである。

私がここで目指すのは、語源論争でも翻訳論争でもない。だが

あえて言えば、「客観」は誤訳であると思う。ところが考えてみると素晴らしい誤訳であって、私はこの言葉がすっかり気に入ってしまった。なぜなら、客観とオブジェクトウムという二つの言葉を比べてみると、そこには空間への私たちの係わり方および空間の中で私たちに会い来る様ざまなものごとへの私たちの構えをめぐる、二つの全く異なった行き方が、鮮やかに描き込まれているのに気付かされるからである。

瀧内楨雄氏は、昨年の本学会大会ならびに『比較思想研究』23号において、西洋思想を支配してきた「掴み」による物の「触覚的認識」と空間の広がりへの嫌悪とを、欧州美術史の中で風景画が極めて遅く現われたことに懸けて論じられた。「触覚的な見方は、これを認識論的に言えば、もの・客観と、これに対峙しこれを外から把握する」という二元論的認識形式に立つものがあり、私はこの認識を主客二元論的・物的・触覚的認識と呼んでおきたいと思います。」ここで氏が「客観」と言われているのは、無論オブジェクトウムのことである。オブジェクトウムが決して見るもの、「観する」ものではなく、これに最も親しい感覚は触覚であり、かつ掴むという行ないに関連するそれだと、氏はドイツの美術史家リーグルなどを引いて断じられた。これはまことに素晴らしい着眼だと思われる。

「客観性」は、というより「オブジェクトウム性」は、もともと距離を置かない係わりとして発生したのである。距離がないとは

相手との間に空間がないということであり、このような認識を理想とするかぎり、空間が嫌われるのはもつともであらう。

道具か客か

私はいま「認識」と言った。ここでもう少し言葉つかいの検討を続けよう。「認識」にあたるやまとことばの「知る」は「天が下知ろしめす」というように、支配の意味を含む。しかし一方、「客観」に与る働きを示す言葉として私たちはふつう、おそらくは井上哲次郎に由来する「認識」を用いている。「認」は「言葉を出さずにこらえる」ところから「相手の言い分を認める」意であり、「識」は織物を織るように「言葉を縦横に組み合わせて明らかにする」意である。もちろん漢字の意味から思想を全面的に断定できるわけではないが、この字づかいから読みとれる考え方は、客観の有様をそのままに認め保たうえ、言葉を用いて表わすことなのである。この意味も、欧州語の「原語」とは全く違っている。

英語の cognition などの本であるラテン語の cognitio は「共に」の意の前綴り co を伴っているが、ドイツ人はこれを Erkenntnis と訳した。前綴り er は「こちら側へと得る」意である。「共に」の位置は掴み取ることによって得られるようである。そして、掴み取ると言えばドイツ語の begreifen に通じ、Begriff とは私たちが「概念」と訳している言葉に他ならない。

仏英語の concept の本になったラテン語の動詞 concipio もまさしく「掴み取る」意である。

他方「概念」の「概」はもともと「杓の上をならす棒」で、そこから「おおよそ・おおむね」の意となった。「概念」の字の意味は「均した考え」「量りの本となる杵組み」であって、しかもこれが今日の（職業哲学者でないふつうの）日本人の「概念」という言葉に対して抱いている、まさしく「概ねの」考えではなからうか。

それこそかなり概ねの言い方となるが、西洋人はオブジェクトゥムを掴み取り、距離を無くすことによって知ろうとするし、日本人は「客観」をあちら側に立て、距離を置いてそのままに保とうとする、または、そうしておくしかないもののあることを認めるといふ構えを採っていると、言葉づかいの上からは推し量れる。私たち日本人にとって、「客観」とは、主観はどうあろうとそれを離れて厳然として存在するもの、あるいは客のように時折こちらを訪れ、場合によってはあちらの都合で、招かれもしないのに向こうからやって来る者である。しかもそれは、感じられては、じめて在るのではなく、あらかじめあちら側に在ったからこそ、折に触れて訪れる。したがってそれは、私たちにあって、こちらの都合をいろいろと謀りながらも、離れたところから空間を隔てて見るのできるものである。しかし、西洋人にとって、オブジェクトゥムは手の中の掴み取られ、あるいは人の前進を阻んで

立ちふさがるものであって、距離を隔てて空間の中に浮かぶのはふさわしくない。

「客観」は「観」の字の示すとおり、感覚に引き当てれば視覚に馴染みが深からうが、もちろん視覚のみのたずさわるものではなく、聴覚や触覚にも現われてくる。こちらとは違う何か、向こう側に明らかに感じられれば、「客観」が在るのである。

触覚については、この中に極めて多様なものが含まれている。文字どおり「触れる」場合には、体との距離は無いにせよ、私の住まう空間の中に、私とは違う何か、向こう側にありありと感じられる場合が多いであろう。これに対して、力を入れて掴んだりぶつかったりする場合にも、触覚という表現が使われる。だがこの場合、相手の有様は、少なくともこちらとは別の何ものかとしての有様は、かえって明らかさを失う。道具を使うために手で握る場合などがその典型であろう。道具は握られたときから体の一部となり、異物であることを止め、私の身体図式を延長するために、言わば「身内」となって働かなければならない。金槌が距離を置いた「客観」であっては、あるいは私が金槌を「認識」しては、釘は打てないのである。

このときの道具の在り方を別の言葉で言えば、「私の自由になる」なにか、としてよいだろう。私の側が「主体」つまりある。じであり、オブジェクトゥムは「客」ではなく「しもべ」となって「自在に」操られる。そして、道具の向かう相手も、例え

ば金槌の向かう釘も、主体たる私の意図を実現し板に打ち込まれてこそ本来の場所に収まったと言える。

このように、オブジェクトウムは、はじめは主体の前に立ちただかり抵抗しながらも、いずれ主体の積極性と支配力に屈し、主体の自由を実現する手段となることにおいて、本来の在り方を全うするのである。オブジェクトウムは本来、距離をとって見られ、対等の、しかし異質な相手として出会う「客」ではなく、不安定、不確定な空間を消し去る一連の行いの終点として、人の前に投げ出されている手段にすぎない。

隔たりと広がり

もちろん西洋思想の中に空間が登場しないわけではない。古代ギリシャにおいては幾何学がさかんに研究され、これはまさしく空間の性質を扱う学問であった。西洋近代科学の代表格である物理学は、質量とエネルギーを時空間の中に配する。むしろ、時間空間の近代的観念を開発したのは、ニュートンなどの物理学者であった。しかしながら、幾何学空間にせよ物理空間にせよ、それらの空間は、その中で向こう側に立っている対等の相手に出会う「客観空間」ではない。

ユークリッド幾何学は空間の性質を図形の相互関係として記述する。この際用いられる主な手法は、移動と重ね合わせからなる。例えば、三角形の合同とは過不足なく重ね合わせることであり、

相似とは角の重なりと各辺の比率の一致のことである。また、線分の比率が $\frac{a}{b} = \frac{c}{d}$ であるとは、長いほうの線分を半分に折ったときに重なることであり、 $\frac{a}{b} = \frac{c}{d}$ とは長いほうを三分に、短いほうを二つに折れば重なるとの謂いである。これらは空間を拡げるのではなく、どうやって距離を無くすかという手順に他ならない。

ユークリッド幾何学は（非ユークリッド幾何学と同じく）、空間とは無関係な記号の列からなる公理系としても記述しうる。幾何学空間そのものも決して目には見えないし感覚では捉えられない。幾何学は空間の広がりを扱うのではなく、空間のたたみ方、摺み方を記しているのである。幾何学は人間が空間を手の中に入れる手段であって、空間と人間とのある種の関係、即ち摺み方の関係において構成された手引きであるとも言えよう。

ニュートンは、自然の仕組みは神の作ったもので、数学の言葉でそれが解説できると考えていた。神は自然の中に法（*lex*）を置いたのであり、人の都合とは無関係な「客観」という発想に近いものがそこには含まれている。そして実際、最近までの近代科学者の研究の信念として、自然の中の「法則の発見」が掲げられてきた。

しかし、ニュートン物理学の法則は、自然を人間と対等な客として捉える構えを取ってはいなかったと思われる。彼の物理学では連続の時空間のなかに質点が配されている。質点は、ある物の持つすべての質量を無限に狭い所に摺み込んで作られた構成物だ

と言えよう。質点は運動し、力によって速度を変化させ、万有引力で互いに引き合う。速度とは空間をどれだけの時間で詰められるかという性質であり、引き合う物体は衝突によって、つまり空間を無くしてその「目的」を達する。空間はやはり広がったままではいられないのである。

ちなみに西洋では、まさしく空間拒否の標語と言える「自然は真空を嫌う」との考え方が、古代、中世を通じておおむね支持された。ニュートンが万有引力説の発表を始めとまでった原因は、この説に真空中の遠隔作用、つまり広がる空間の働きを認める側面があったからとも言われる。それでもニュートンの理論においては、全体として見れば、空間は乗り越えらるべきもの、いや、方程式によってすでに掴み込まれたものと言えるであろう。(点の無限の連鎖を計算し尽くす微積分という数学！)

つまりこれら幾何学や物理学の空間は、空間としての性質を持つているとしても、それは距離を無くして掴むための前提ではない。もちろんここに至れば、人間の肉体の持つ力の役割は大変小さくなる。だが人類は機械を発明し、金槌が釘を打ち込むのと同じように、月や火星にロケットを撃ち込む。これは人間の掴みの力の拡張と言えよう。机上の計算にはごくわずかの筋力しか必要としないし、もとより筋力は計算の本質ではない。電算機のオン・オフの信号が、計算だけなら人の手よりも巧みにやってくれる。だが計算結果は実際の物質的検証によって試されなければ

ばならない。計算は掴みまでの手間、掴むまでにしなければならぬ仕事の指標として理解されているのである。

このような一連の目的論的作業を受け入れる空間の性質は、「隔たり」と呼べるであろう。人はこれに乗って、オブジェクトウムを掴んで安心するのである。西洋文明の追い求めてきたのは、ほぼ一貫して、掴みの手許に差し出されたオブジェクトウムである。隔たりの空間はその前に立ちはだかる敵役とも見えるが、オブジェクトウムは必ず隔たりの向こうに差し出されるのである。初めから距離がなければ主体のみが存在することとなり、何事も起こらない。隔たりとはむしろ、目標に導く楽しみな「前戯」なのだとしたほうがよいのではないか。

もちろん、この隔たり空間とオブジェクトウムとの人間に対して持つ意義は大きい。西田幾多郎でさえ次のように言う。「我々の色々な考える働きは、総合とか分析とかいうものであるが、総合分析は発達してくれば頭で考えると普通には言っているが、実は初めは手から段々総合分析というものが発達してきたものと思う。手というもので物を分けるとか、又手で掴んでいっしょにするとかいうように、色々の智力というものは手から発達したと思われる。」これこそ「科学技術」と「物質文明」を支えるものである。

これに対して、もうひとつの空間、ないし距離の性質を「広がり」と呼んでおきたい。こちらは掴み、距離を詰めなくてもよい、

それ自身として在る空間であり、掴みの欲望を刺激することなしに、あるがままに目に映る。私たちが、「客観」に出会い、あるいは「客観」が私たちを訪れるのは、広がりの中においてである。

西洋で本当に嫌われたのは広がり空間であった。瀧内氏は空間を平面化し抑圧した建築物の代表としてエジプトのピラミッドを挙げたり、グールの言葉を引きいられるが、ここではウィリアム・ジェイムズの言うところを聞いてみよう。「野蛮人にとって、自然はほとんど統一をもちえないのである。それはヴァールブルグスの夜の行列であって、そこでは光と形とがいりまじり、

……世界の無気味さ、わるさや多様性、自分達の力の小ささ、魔術的な驚異、ものごとを動かすすべてのものが説明できないという状態、こういったものがたしかに、文化のこの段階をもっともよく性格づけるものであろう。」⁽⁵⁾

掴みきれない光や形に満ちた空間は、人の力の小ささを思い知らせる、というわけである。この言葉は、キリスト教の土着宗教に対する抑圧や、ことにアメリカ白人の、アニミズムの傾きの強い信仰を持った「インディアン」を征服しての建国の歴史から、多少割り引いて聞かなければならないであろうが、それでも手の中に入らぬ広がりへの嫌悪を伺うには十分であろう。⁽⁶⁾

ハイデガーの唱えた人間以外の世界内存在の様式を特徴づける「手許存在 (Zuhandensein)」とは、まさしく「手中に」できるオブジェクトゥムのことであったが、彼はその導入にあたって、

デカルトが空間を単なる広がりにしてしまったと批判した⁽⁷⁾。デカルトの立場からの「広がり空間」は、ハイデガーの考えるほど手許を離れた「客観的」広がりではなく、むしろ幾何学で余すところなく掴み取れるものだったが、彼はこれを誤解し、ものごとの道具性を暴露するための存在論的目配りの届かない先に立てられた広がりとして非難したのであった。ここにも、西洋文化の広がりに対する恐れが如実に示されている。

客観の認識

道具が人の手の中に入り、相手がこちらから自由になるとき、私たちは相手を認識したと言えるのだろうか。この問いに肯定をもって答える人も、もちろん西洋の思想家のなかには多い。例えばジャン・ピアジェは、知能の発達と認識の完成とは、人間が「同化シエマ」をあらゆるものにあらゆる仕方でも適用できるようにすること、言い換えれば宇宙の隅々まで思いのままに操作できるようにすることだと考えている。⁽⁸⁾

しかし、認識するということが、もし相手のありのままを認めることだとすれば、隔たりをなくして掴みこむことがそれにあたると思えない。この時の相手の有様は、どこまでもこちらの目的に相関しているからである。「対象と観念の一致」という真理観は、西洋的伝統の主な流れの一つだが、この「一致」にも距離を詰めた重ね合わせによる掴みが隠されていると思われる。

この短い論考で、認識論の大問題に深く踏み込むことは到底無理だが、一つだけ押さえるるとすれば、一致を求めて近づくと、

明らかだと考えられるのはほとんどの場合、近づいてゆくこちら側の在り方だという点を挙げたい。デカルトの「我思う」がまさしくそうであるし、イギリスの「経験論」でも、疑い無く与えられているのは、人の「内側」の、距離のない感覚や観念である。

フッセルらの「現象学」においても、隈無く明らかなのは「超越論的自我」の働き(Leistung)である。それらは、金槌を握りこむ手と同断ではなからうか。

だが、握りこむ手と握られた金槌とが違うのは初めから分かったことである。金槌の取っ手は、握られるためには細くまっすぐな棒状でなければならないし、それを握る手は内部に空洞を持った筒状の形を作らなければならない。手と道具は違う姿においてはじめに触れあい、その違いにおいてこそ一体性が形成される。

ところが、「対象と観念」は同じ姿で重ね合わせるものでなければならぬはずである。道具としての一体化は客観としての相手との一致はもたらさないから、その違いがさらに一致しようという欲望を産み出す。そして、一致しようとするとき、強く握るほど、むしろ客観としての相手と「主観」との違いは際立ってくるのではないか。そこで実現されるのはあくまで「自分の自由」ではないからである。客観は、こちらの都合によって現われては

くれないからこそ、客観なのである。

アンリ・ワロンは、ピアジェの知能観を「場面の知能」として限定的にのみ位置づけ、目的が達成されれば消滅する活動であり、そこからは自己と客観との区別や、客観相互の関係の認識は産まれてこないと批判した。ワロンによれば、目的達成の動作に吸収しきれない、「真似」や「ふり」などの活動に起源を持つ自分と相手の、また相手どうしの似通いの認めが、違いながらも係わりあう複数のものごとの在ることの理解に通じるのだという。掴みの欲望の図式をはみ出すものが、広がりの中で互いに出会い係わりあう客観や自己の認識を導くわけである。

「客観」という言葉を作りだした日本人にとって親しみやすいのは、もちろんこの後者の議論であろう。人間は自然の中で特別な主体でもなければ霊長でもなく、あらかじめ他のあらゆるものと異なりながらも対等に、共に在るという考え方は、今日ではむしろ平凡な主張ともなりつつある。空間の広がりや距離を共存の場として認め、かならずしも隔たりの取り去りを予定しない観点は、今西錦司の「棲み分け」を基礎に置く進化論にも通ずるであろう。

正岡子規は、自らも「客観」という言葉を多用しながら、文学として、特に短詩形式において客観を描くことの必要を説いた。

その客観的な俳句の良い例のひとつに

五月雨や垣根の白き草の花 叟柳

を挙げています。垣に白い花が咲く。私は取ろうというのでも、見

せ物にして金を得ようというでもない。ただ五月雨の降る広がり
の空間の中に、私もいればその白い花も咲く。何のために在る
のかを、人がわざわざ企んだり氣遣ったりして「暴露」する必要
もなく、ただ「ありのままに正直に詠むがよろしく候¹³」というの
である。

もちろん客観が「主観」と一致せず、「客」としての自由を持
つとしても、それで世界のすべてが互いによそよそしくただ並存
するという心配はない。先号で論じた安藤昌益は、世界のすべて
のものはそれ自身単独では成り立たず、他の何ものかと一体
であることを「互性」として説いた¹⁴。私の立場からは摺みえず係
わりを拒むように、あるいは自由を妨げるように思われるものも
より大きな、根本的な立場からすればもうすでに私に一致してい
る。なぜなら、見かけの自律性の背後を、実は既に共に在る係わ
りが支えているからである。

こういう客観に満たされた広がりの中の空間では、客観を知る
ことが己れを知ることとなり、相手の立場を生かすことが己れの
自由を実現するという「逆説」が、本来矛盾なく実現するはずで
はある。だが、その有様の詳らかな説き明かしは、また機会を改
めねばならない。

- (1) 「客観」は古代中国語では「外観」「見栄え」などの意味がある。
- (2) 龍内楨雄「物の認識と風景の直観」平成9年『比較思想研究』

23号

(3) ユング派の心理療法家ヒルマンは、近代的な自我をギリシャ神話
の怪力の英雄になぞらえ、「ヘーラクレス張りの我れ Herakleian
ego」と呼んだ。彼は、この世の現実を機械的および生命的な力で
変革し利用しようとする構えを近代の支配的な流れと捉え、これに
逆らって、力のない、氣に満たされた世界、死と魂の世界の重要性
を説いた。Hilman, James, 'The Dream and the Underworld',
1979 Harper & Row, New York

(4) 西田幾多郎「信濃哲学会のための講演」『西田幾多郎全集』第14
巻 p.279 岩波書店

(5) James, William, 'A Pluralistic Universe' p.15 (Burkhardt,
F. H. etc.) Harvard University Press, 1977. 『多元的宇宙』 p.18
吉田夏彦訳 日本教文社 昭和36

(6) ウィリアム・ジェームズはしかし、晩年には心霊術など靈的な世
界に関心を寄せるとともに神経症を病んでいた。手がかりのない広
がりの空間の重要性に気付きながら、近代的目的論の極致とも言う
べきプラグマティズムのかつての旗手としては、それに適切に係わ
りきれなかったであろう。

(7) Heidegger, Martin (1972), "Sein und Zeit", (orig. 1927 Max
Niemeyer Verlag, Tübingen) s19

(8) Piatet, Jean (1986), "La naissance de l'intelligence chez
l'enfant", Delachaux et Niestlé, 邦訳『知能の誕生』訳者：谷村
寛・浜田寿美男 昭和53 ミネルヴァ書房

(9) ただし、これは道徳的な摺みの理論的側面での話である。実際に
摺もうとするときには、まず広がり空間のなかに共存して出会い、
客観はむしろはじめに姿を曝している。摺みの理論ではこのことが
分からなくなる。

(10) Walton, Henri (1970), "De l'act à la pensée", Flammarion, Paris

(11) 今西錦司『私の霊長類学』昭和51年 講談社学術文庫

(12) 正岡子規「松羅玉液」、『正岡子規』筑摩日本文学全集 一九九二

筑摩書房 p.128

(13) 正岡子規「歌よみに与うる書」同右 p.342

(14) 拙論「安藤昌益にみる自然の一なること及び方法としての却け
——否定神学との比較を通して——」『比較思想研究』23号 平成

9年

(じつかわ・みきろう、哲学・臨床心理学、

姫路獨協大学助教授)